

富士川水系河川整備基本方針

土砂管理等に関する資料（案）

令和 年 月

国土交通省 水管理・国土保全局

目 次

1. 流域の概要	1
2. 山地領域の状況	6
2.1 山地領域（砂防）の状況	6
2.2 砂防事業の状況	7
3. ダム領域の状況	11
3.1 富士川水系のダム	11
3.2 ダム堆砂状況	12
4. 河道領域の状況	13
4.1 河道の特性	13
4.2 河床変動の経年変化	18
4.3 土砂動態	23
4.4 河床材料	28
4.5 河口部の状況	30
5. 海岸領域の状況	32
5.1 汀線変化	32
5.2 海岸領域での取組	32
6. まとめ	34

1. 流域の概要

富士川はその源を長野、山梨県境の南アルプス甲斐駒ヶ岳の北西に位置する鋸岳(標高2,685m)に発し、北上したのち流路を南東に変え、八ヶ岳裾野に横たわる峡谷をなす一大断層に沿って流下し、右支川として急流河川の大武川、小武川、御勅使川等、また左支川として塩川等を合わせ、甲府盆地西部を南流している。

富士川の上流部は山間溪谷・甲府盆地が広がり、富士川と笛吹川に挟まれた天井川の状態となっており、ヨシ・オギなどの群落が見られ、アユ釣りで賑わっている。清水端下流の中流部では山付き堤が所々に分布し、魚類や鳥類などの種類数も多く、豊かな自然環境を有している。一方、秩父山地の甲武信ヶ岳(標高2,475m)を水源とする笛吹川は、山間狭窄部を経て甲府盆地へ入り、重川、日川及び甲府盆地の平地河川等を合わせ、甲府盆地東部を南流し、市川三郷町において富士川に合流している。その後富士川は再び山間部へ入り、早川、波木井川、芝川等の支川を合わせ静岡県富士市において駿河湾に注いでいる1級河川であり、河口部に扇状地を形成している。なお、一般的には富士川のうち、笛吹川合流点より上流を釜無川という名で親しまれている。

富士川流域は長野、山梨、静岡の3県にまたがり、流域面積3,990km²(沼川流域含む)、幹川流路延長128kmをもち、1次支川には笛吹川、早川、御勅使川等、2次～6次支川には荒川、平等川、潤井川等、総計552の法河川を有している。

富士川流域は、約90%が山地であり、我が国第1位(富士山)、2位(北岳)の高峰を流域内に持つことから、富士川の河床勾配は急で最上川、球磨川と並んで「日本三大急流河川」といわれている。また、流域内の地質は複雑で脆弱である。これは「糸魚川－静岡構造線」と呼ばれる大断層が流域内を縦断しているのに加え、平行、交差する断層が幾筋もあることに起因する。このため流域内には崩壊地が多く、崩壊した土砂が富士川に流出・堆積して天井川を形成している。

富士川流域の一部には秩父多摩甲斐国立公園、南アルプス国立公園、富士箱根伊豆国立公園といった自然の宝庫が含まれている他、急峻な山々や溪谷が美しい眺望を見せ、レクリエーションの場としても利用されている。

また、甲府盆地内の甲府市及び河口部の富士市、沼津市は、山梨県並びに静岡県の中東部地区における社会・経済・文化の基盤をなしている他、人口・資産が集中しているため、今後、本水系の治水、利水機能の重要性が増々高くなるとともに環境についても適正に管理する事が極めて重要になってきている。

富士川流域の地形は、山梨県では甲府盆地とそれを取り囲む秩父山地、南アルプス山地、御坂山地などからなり、北岳、八ヶ岳、鳳凰三山、大菩薩嶺などの3,000m級の名峰が連なっている。釜無川、笛吹川両河川が合流する甲府盆地は、扇状地性の沖積平野を形成し、その下流部にあたる峡南地域は、富士川の東側を天守山地、西側を身延山地が連なり、富士川はその間を流れくだっている。

河川形状をみると、甲府盆地内を流れる部分は平地河川となっているが、富士川(釜無川)の上流部、笛吹川上流部、禹之瀬から下流部の県境付近までは溪流の景観を呈している。

静岡県では、富士山西南の山麓が駿河湾に向かって広がり、富士川の河口部は扇状地を形成している。

富士川流域の地質の特徴は以下のように示される。

流域の北東部にあたる甲府盆地北方山地の地区は、花崗岩類・粘板岩等が基盤をなし、これらに沿って火山性岩石が南部を広く覆っている。中央の甲府盆地の基盤は、花崗岩、安山岩からなり、その上を砂・泥・礫の混じりあった粗粒の未固結堆積物や火山噴出物が覆っている。八ヶ岳南麓の山地は安山岩によって構成され、その南の平原は泥岩・火砕流として流下した半固結や一部固結した火山砕屑物が大量に堆積している。

中流部の東域にあたる御坂山地の地域は新第三紀の火山性岩石と堆積岩で構成されるが、特に玄武岩と花崗岩が主流となっている。南アルプス東部は、主に中生界・古第三系の粘板岩、頁岩、砂岩及び花崗岩類で構成されている。さらに、早川、春木川の縦谷と鳳凰三山東麓はフォッサ・マグナの西縁を画す大断層である糸魚川－静岡構造線となっている。

下流域の富士川沿川の低地帯は各種の固結堆積物と火山性岩石からなっている。河口の富士川扇状地ではシルト層を挟在する砂礫層が堆積し、また、扇状地東部の浮島ヶ原は、海成砂層、粘土層からなり、一部は泥炭化している。

以上のように、富士川は、日本列島を東西に分割する糸魚川－静岡構造線に沿って流下する河川であり、多くの断層群の影響で、流域が崩壊しやすい条件にある。そこに豪雨とともに洪水となると、土砂が崩壊して富士川に流出し、土砂移動とともに著しい河床変動を引き起こす大きな要因と考えられる。

富士川流域の気象は、上・中・下流において全く異なる様相を呈している。上流部の甲府は、昭和 63 年（1988）年～令和 5 年（2023）年の平均気温 15.1 度、平均降水量 1,156.3mm であり、気温の年較差が多く、雨が少ない内陸的な気候を示している。中流部の切石^{きりいし}では、山地部ということもあり、平均気温は 14.1 度と最も低く、台風期の降雨量が最も多いという特徴を持つ。一方、下流部の富士^{ふじ}は、平均気温 16.2 度、平均降水量 2,195.0mm であり、気温の年較差の少ない、温暖多雨の気候となっている。

表 1-1 富士川流域の概要

項目	諸元	備考
流路延長	128km	
流域面積	約 3,990km ²	
流域市区町村	12 市 8 町 3 村	
流域内人口	106 万人	令和 2 年調査
想定氾濫区域内人口	560 千人	平成 22 年調査

〈山地領域〉

糸魚川-静岡構造線が縦断し、基岩には亀裂が多く、風化作用を受け、極めて脆い地質が分布する釜無川流域・早川流域では土砂の生産・流出が活発で、昭和以降だと昭和28、29、34、57年（1953、1954、1959、1982年）、平成16、23年（2004、2011年）に大規模な崩壊や土砂災害が発生した。昭和34年（1959年）の災害を契機に、国による直轄砂防事業が開始された。

〈ダム領域〉

補助ダム、利水ダム合わせて15基のダムが建設されている。一部の発電専用ダムでは計画堆砂量を上回る堆砂が見られるが、多目的ダムにおける堆砂は概ね計画の範囲内で進行しており、現時点で施設の機能を阻害する堆砂は確認されていない。

〈河道領域〉

大規模出水時に大量の土砂流出による河積不足が想定される一方、令和元年（2019年）10月洪水では複数地点で河岸侵食や堤防・護岸の被災が発生している。継続的な河積確保対策として、特定砂利採取を活用した河床掘削を実施している。

〈河口・海岸領域〉

海岸領域では、海岸保全施設の整備、港湾と連携したサンドバイパス、砂防と連携した養浜等により、海岸侵食は抑制され、回復傾向となっている。

〈総合的な土砂管理の取組〉

富士川水系及び富士海岸（富士川流砂系）における土砂管理に関する課題については、各機関で様々な取組がなされてきた。平成28年（2016年）3月には、「富士川水系及び富士海岸（富士川流砂系）総合的な土砂管理の取組連携方針」を策定し、関係機関のより一層の連携強化を図っている。

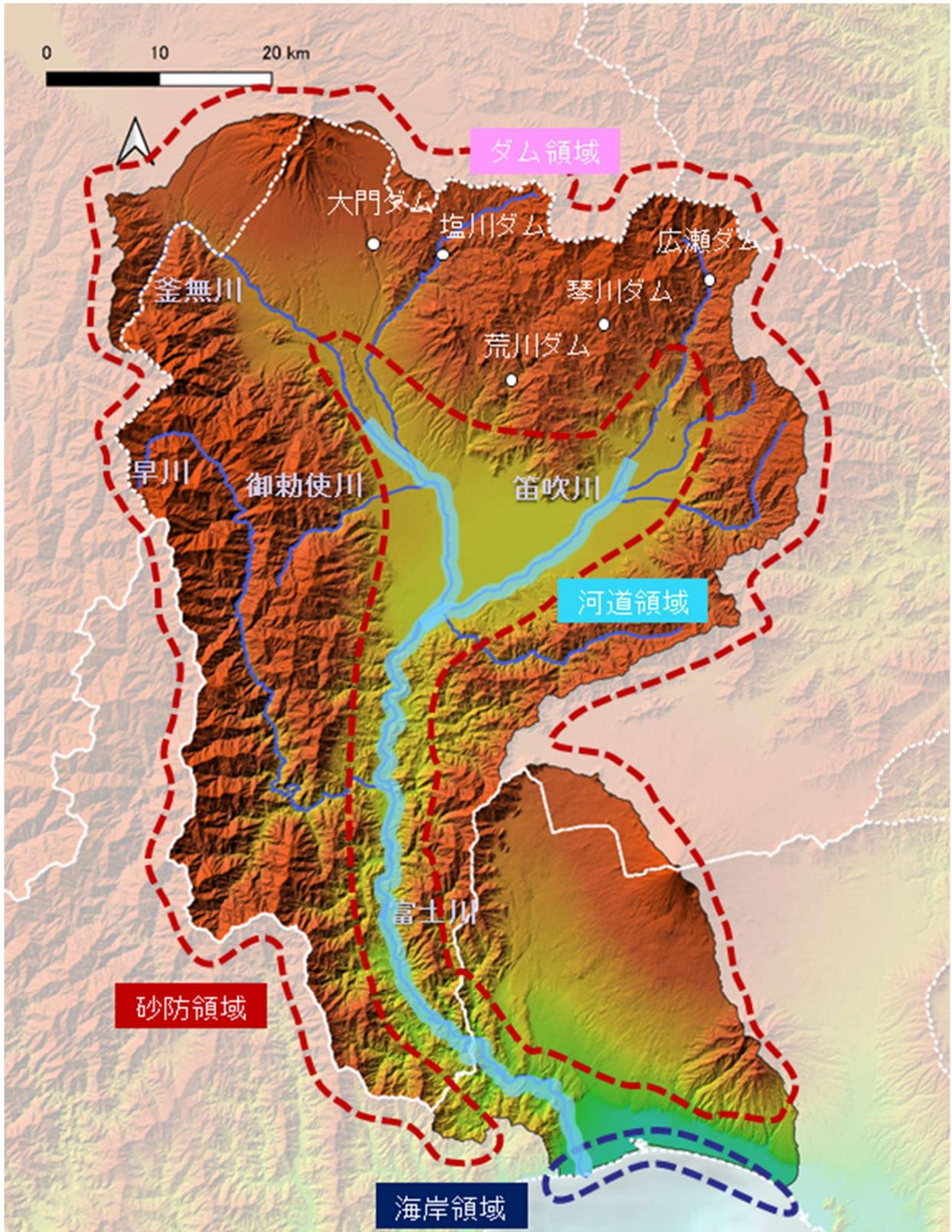


图 1-2 領域位置図

2. 山地領域の状況

2.1 山地領域（砂防）の状況

富士川流域における土地利用の変化を図 2-1 に示す。昭和 51 年度（1976 年度）と令和 3 年度（2021 年度）を比較すると、山梨県の甲府盆地と静岡県富士市、富士宮市の平野部において市街地化が進行しており、対して農地が減少している。

釜無川流域及び早川流域は、糸魚川－静岡構造線が縦断し、基岩には亀裂が多く、風化作用を受け、極めて脆い地質が分布する。流域内には土砂生産と関連性の高い土砂災害警戒区域が広く分布しており、昭和 34 年（1959 年）の災害を契機に、国による直轄砂防事業を開始し、土砂災害対策を実施している。

また、富士山には、大沢崩れをはじめ普段は流水の無い沢が多く存在しており、これらの溪流では融雪期や豪雨期にたびたび「土石流・雪代（スラッシュ雪崩）」が発生し、田畑、家屋等に被害を与え、潤井川の河床上昇や田子の浦港への土砂堆積を引き起こすなど、甚大な被害が発生してきた。富士山大沢川の直轄砂防事業は昭和 44 年度（1969 年度）から着手し、大沢崩れ・扇状地や富士山南西麓の各溪流において、砂防施設の整備を行っている。

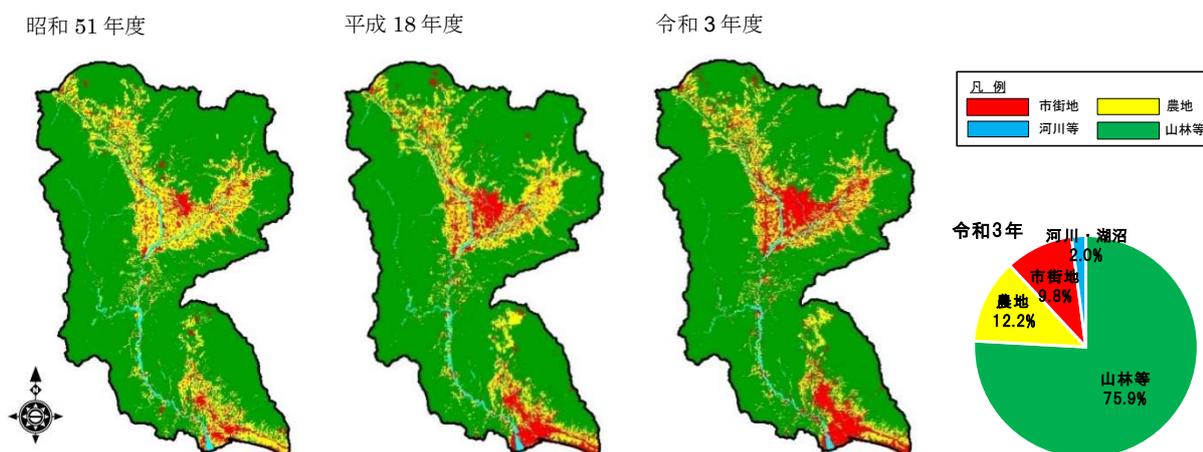


図 2-1 土地利用の変化

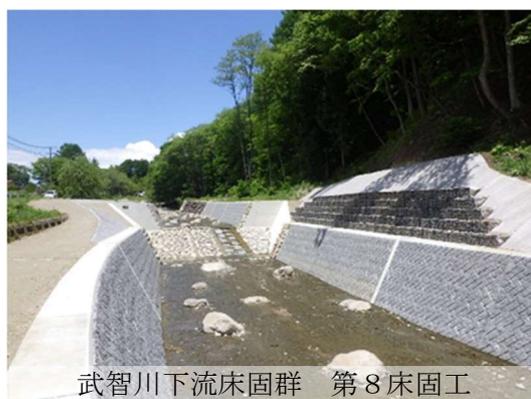
2.2 砂防事業の状況

(1) 釜無川

釜無川上流域の山地においては、標高 3,000m 級の山々による急峻な地形と本州を横断する断層である糸魚川－静岡構造線による脆弱な地質により多くの崩壊地を有している。今後とも土砂流出リスクを有する状況であることから、引き続き砂防堰堤等による土砂流出対策の推進が必要である。

令和元年東日本台風（台風第 19 号）では、山梨県北杜市の大坊雨量観測所で連続雨量 389mm を記録した。大武川では土石流が発生したが、整備済みの砂防堰堤群で捕捉し、下流の家屋等の被災を防いだ。

直轄砂防事業の進捗については、現在までに釜無川の上流域で砂防堰堤 52 基、床固工等（護岸、山腹工等含む）125 基が整備されている。



(2) 早川

早川は、3,000m級の山々を源とする急流河川で、非常に急峻な地形を呈しているとともに流域内を糸魚川－静岡構造線が縦断し、基岩には亀裂が多く、風化作用を受けた極めて脆い地質構造と急峻な地形を呈していることから、荒廃地や大規模崩壊地が流域の大部分を占め、土砂生産・流出が極めて活発であることから、引き続き砂防堰堤等による土砂流出対策の推進が必要である。

平成 23 年（2011 年）9 月の台風第 12 号では、山梨県早川町の春木川雨量観測所で連続雨量 895mm を記録し、池の沢では土砂や流木の流出により町道が通行不能となり、また、宿泊施設に駐車していた車 20 台が流され、近傍の宿泊施設の約 300 名が孤立する甚大な被害が発生した。

直轄砂防事業の進捗状況については、現在までに早川流域で砂防堰堤 128 基、床固工等（山腹工等含む）64 基が整備されている。



(3) 富士山

富士山麓には、大沢崩れをはじめ普段は流水の無い沢が多く存在しており、これらの溪流では融雪期や豪雨期にたびたび「土石流・雪代（スラッシュ雪崩）」が発生し、田畑、家屋等に被害を与え、潤井川の河床上昇や田子の浦港への土砂堆積を引き起こすなど、甚大な被害が発生してきた。

富士山大沢川の直轄砂防事業は昭和 44 年度（1969 年度）から着手し、大沢崩れ・扇状地や富士山南西麓の各溪流において、砂防施設の整備を行っている。

大沢崩れは富士山西斜面に位置し、山頂直下から標高 2,200m 付近まで、延長約 2.1km、最大幅約 500m、最大深さ約 150m 崩壊面積約 1km²、崩壊土砂量は約 7,500 万 m³（東京ドーム約 60 杯分）に及ぶ、日本最大級の崩壊地であり、現在でも活発に崩壊が進んでいる。昭和 45 年（1970 年）からの観測において、31 回の土石流を繰り返しながら約 796 万 m³の土砂が下流に流出している。

大沢川では、近年も土石流が発生しており、大沢川遊砂地で令和 3 年（2021 年）8 月に約 25.9 万 m³、令和 3 年（2021 年）3 月に約 39.5 万 m³の土砂を捕捉し、遊砂地の効果により下流域での土砂被害は発生しなかった。

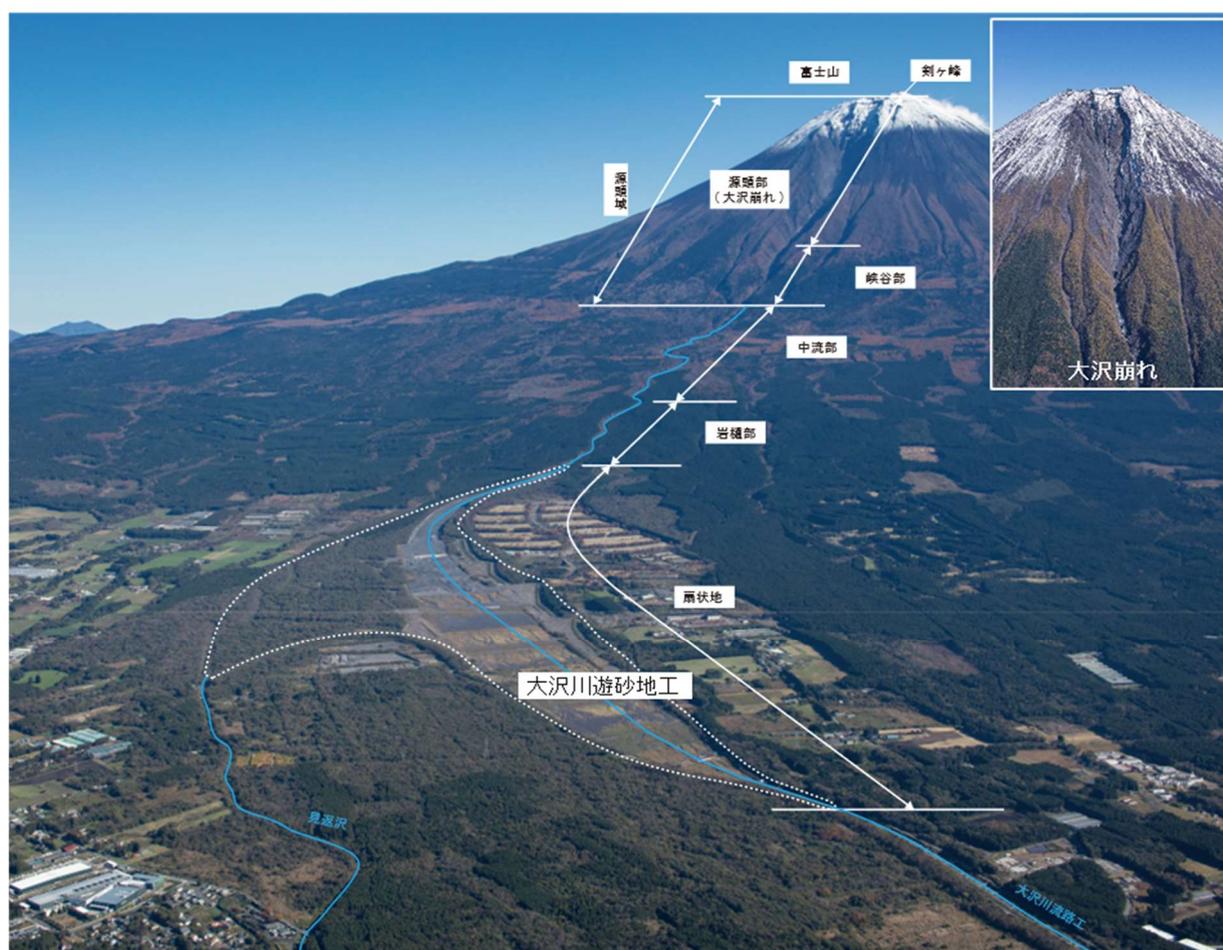
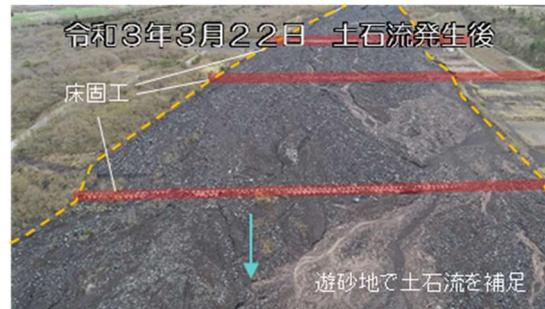


図 2-2 大沢崩れと大沢川遊砂地



図 2-3 大沢川遊砂地に流下した2mを超える巨石（平成12年11月21日発生 土石流）



3. ダム領域の状況

3.1 富士川水系のダム

富士川水系には、補助ダム、利水ダムを合わせて 15 基のダムが存在する。

また、洪水調節機能の強化を図る上で、河川管理者及び関係利水者等の間で結んだ富士川水系治水協定（令和 2 年（2020 年）5 月）を踏まえて、事前放流により一時的に洪水を調節するための容量を確保するとともに、河川法第 51 条の 2 に基づく「富士川水系ダム洪水調節機能協議会」を設置（令和 3 年（2021 年）10 月）し、事前放流を推進している。

表 3-1 ダム諸元

名称	河川名	竣工年	目的	管理者	流域面積 (km ²)	有効容量 (万 m ³)	治水容量 (万 m ³)	洪水調節 可能容量 (万 m ³)
広瀬ダム	笛吹川	1974	FNWAP	山梨県	76.64	1135	615	388
荒川ダム	荒川	1985	FNW	山梨県	72.40	860	530	259
大門ダム	大門川	1987	FNW	山梨県	51.70	235	130	130
塩川ダム	塩川	1998	FNWAP	山梨県	85.30	890	380	72
琴川ダム	琴川	2007	FNWP	山梨県	10.00	475	155	106

表 3-2 洪水調節可能容量の一覧

ダム	洪水調節容量 (万 m ³)	洪水調節可能容量 [※] (万 m ³)	基準降雨量 (mm)
広瀬ダム	615	388	350
荒川ダム	530	259	350
大門ダム	130	130	350
塩川ダム	380	72	350
琴川ダム	155	106	350
小樺ダム	0	1	350
西山ダム	0	55	350
雨畑ダム	0	115	350
柿元ダム	0	107	350
保利沢川ダム	0	0	350
上来沢川ダム	0	0.5	350
頭佐沢ダム	0	2	350
丸山ため池ダム	0	37	350
上日川ダム	0	673	350
大倉川農地防災ダム	0	205	350

※ 各種の条件を仮定し算出した最大値

3.2 ダム堆砂状況

一部の発電専用ダムでは計画堆砂量を上回る堆砂が見られるが、多目的ダムにおける堆砂は概ね計画の範囲内で進行しており、現時点で施設の機能を阻害する堆砂は確認されていない。

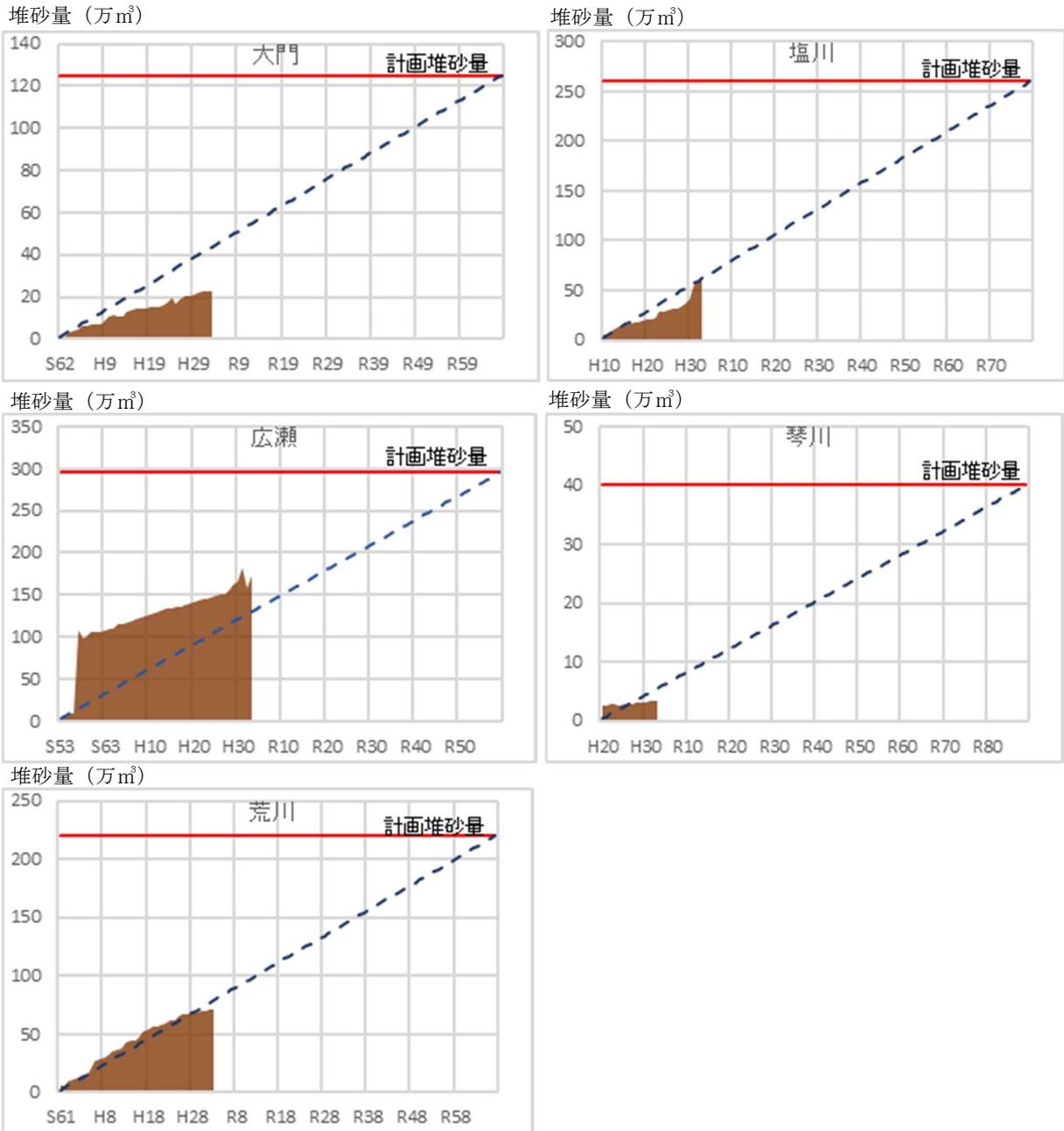


図 3-1 各ダムにおける累加堆砂量

4. 河道領域の状況

富士川流域における河道特性は以下に示すとおりである。

4.1 河道の特性

(1) 富士川上流（釜無川）（清水端上流）

釜無川は南アルプスの山々が連なる山岳部から流下し、南八ヶ岳の裾野に横たわる峡谷を通り、甲府盆地に流れ込んでいる。山岳区間では、南アルプス国立公園を含む自然豊かな溪流景観を呈し、甲府盆地内では扇状地性の沖積平野を形成する平地河川となっている。

河道内では、多列砂洲を形成しており、高水敷の砂礫河原にヤナギやハリエンジュ林が発達している。また、急流河川であることから局所洗掘を生じる他、崩壊土砂の堆積によって天井川を形成している。

河床勾配は 1/100～1/700 程度、河床材料は 40～270mm 程度の砂礫となっている。

(2) 中上流部・中下流部（禹之瀬～雁堤上流）

禹之瀬から雁堤上流までは、甲府盆地下流部の峡南地域にあたる。沿川は富士山の西北にかけて連なる天守山地と南西側の身延山地が連なり、富士川はその狭窄部で蛇行を繰り返しながら流れ下っている。

中流部は山付き区間が多く、河道内には広い砂礫地が広がっている。

河床勾配は 1/200～1/400 程度、河床材料は 30～210mm 程度の砂礫となっている。

(3) 下流部

雁堤上流から河口においては、富士山西南の山麓が駿河湾に向かって広がっており、富士川の河口部は扇状地で天井川を形成している。

急流河川の河口部であるため、河口の割には水面幅が狭いが、河道内には広大な高水敷が形成されており、運動場や公園緑地、砂礫河原が広がっている。また、周辺は有名な探鳥地であり、堤内地は住宅地や工場となっている。

河床勾配は 1/300～1/400 程度、河床材料は 50～180mm 程度の砂礫となっている。

(4) 笛吹川

笛吹川は、上流部では秩父多摩甲斐国立公園内の山間溪流の様相をなし、平地部では石和・山梨の市街地及び田園地帯を流下し、富士川に合流している。河道内には砂礫地が少なく、ヨシ原やヤナギの河畔林が広がっている。河床勾配は上流が概ね 1/300 以上と急勾配であるが、平地では 1/1,100 程度と緩く、河床材料も上流では 50～190mm 程度の砂礫、平地では概ね 2mm 未満の砂・シルトとなっている。

<上流>

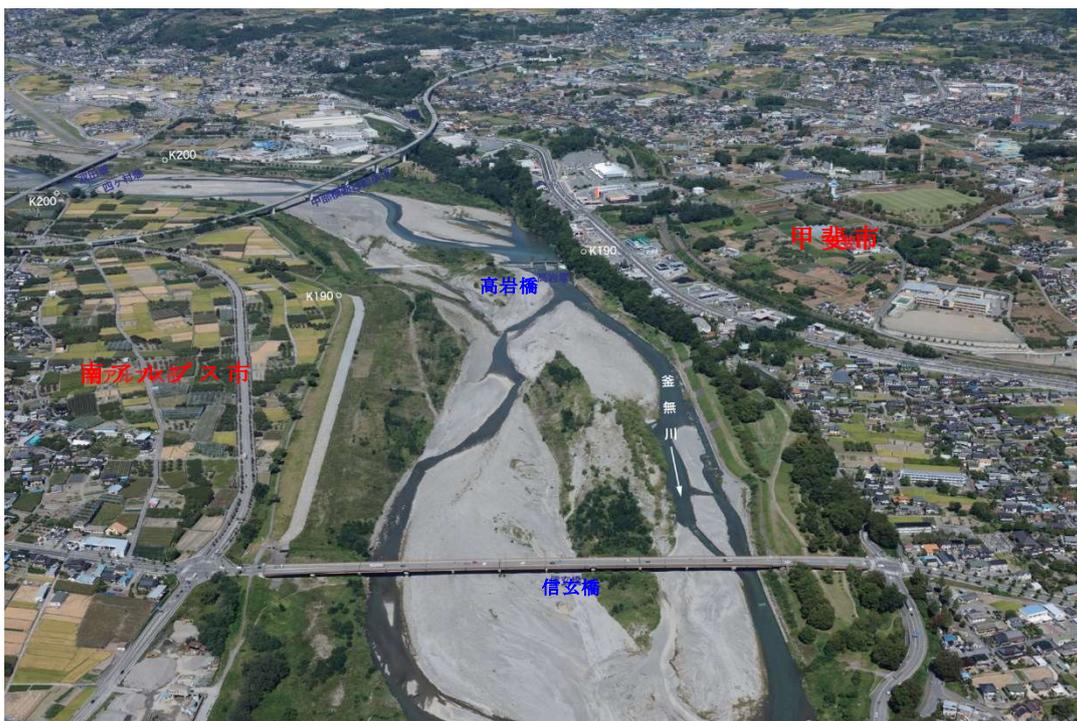


图 4-1 富士川（釜無川） 信玄堤・高岩付近(K-175 付近)



图 4-2 笛吹川 根津橋上流万力林付近(F-230 付近)

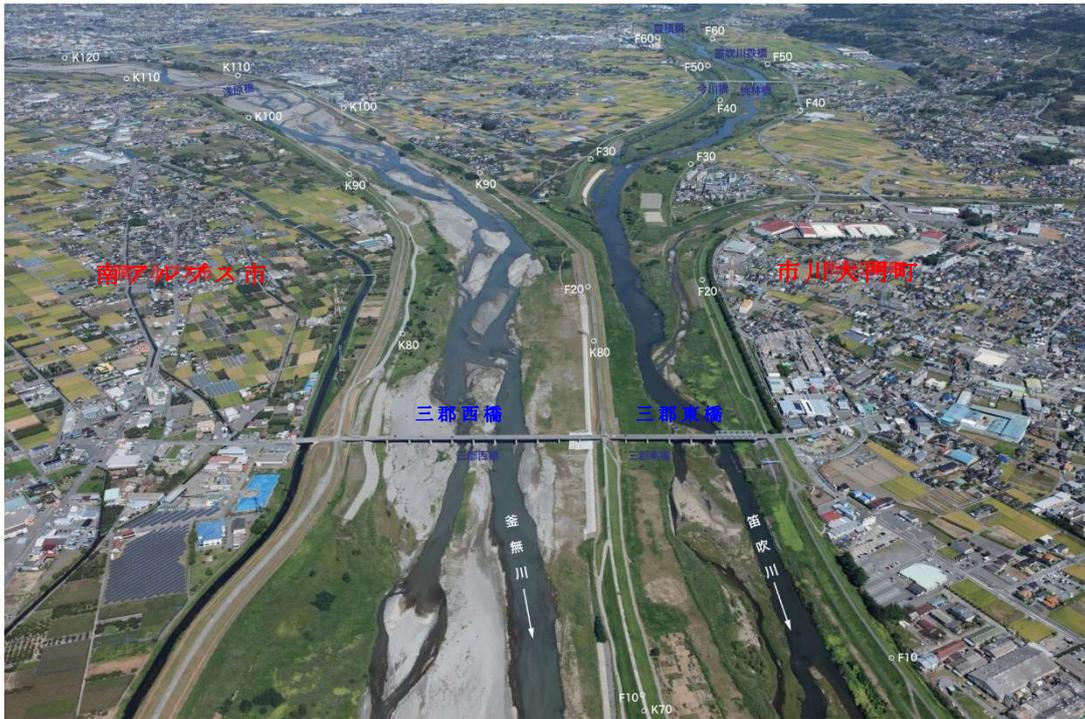


図 4-3 富士川（釜無川） 笛吹川合流点付近（K-80 付近）

< 中流 >

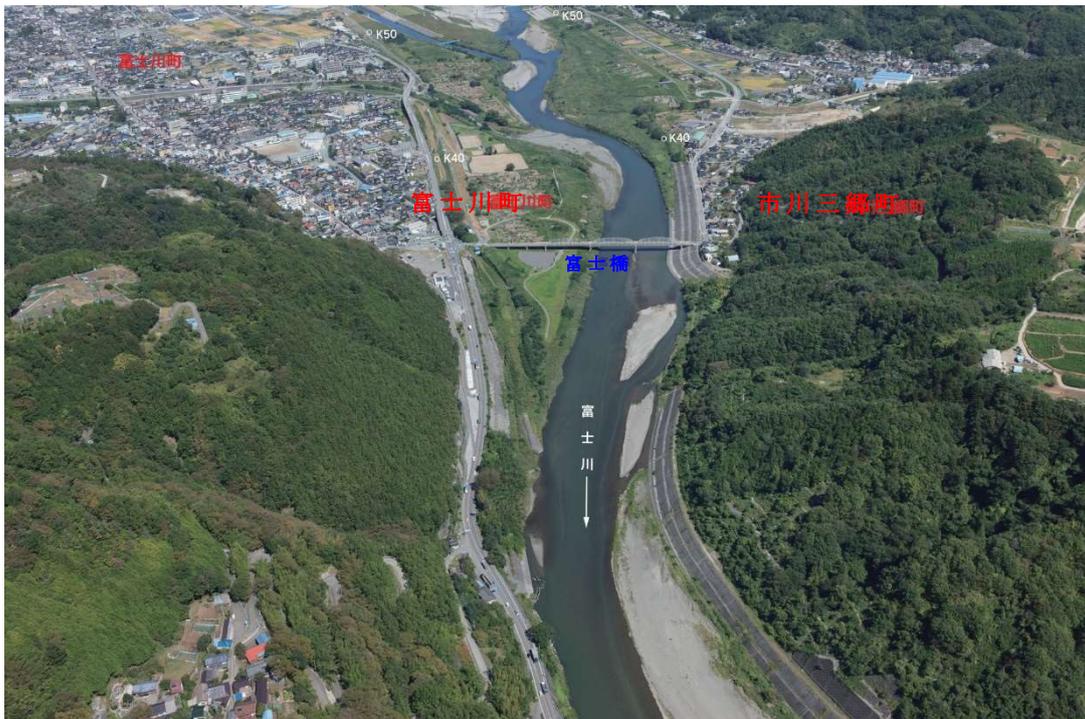


図 4-4 富士川 狭窄部禹之瀬付近(K-20 付近)



图 4-5 富士川 早川合流点付近 (H-255 付近)

<下流>

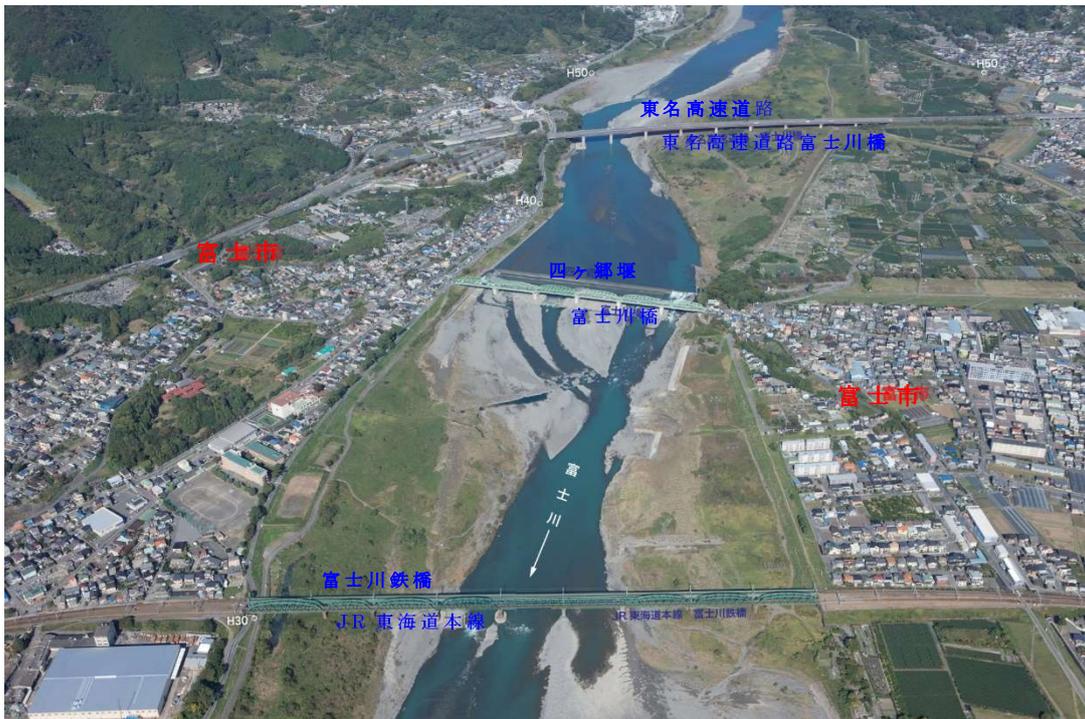


图 4-6 富士川 雁堤を望む富士川橋付近(H-35 付近)



図 4-7 富士川 駿河湾に注ぐ河口部

4.2 河床変動の経年変化

河川領域の土砂変動量を図 4-8～図 4-10 に示す。

富士川では、平成 5 年（1993 年）から平成 10 年（1998 年）、平成 10 年（1998 年）から平成 16 年（2004 年）にかけて、H-40 より上流区間で洗掘傾向となっている。また、十島堰や塩之沢堰の上流で経年的に土砂が堆積傾向となっている。近年では、比較的安定傾向となっているが、令和元年東日本台風（台風第 19 号）前後では十島堰下流で堆積傾向にある。富士川では、図 4-11 に示すように、K-50 より K-180 の区間で経年的に砂利採取が実施されているため、これらの人為的な影響を生じているものと考えられる。

釜無川では、K-60 笛吹川合流点から K190 高岩堰までの区間において、昭和 62 年（1987 年）から平成 16 年（2004 年）までに、一連区間で洗掘が生じている。また、一本杉頭首工や御勅使川合流点付近では、近年、堆積傾向となっている。令和元年東日本台風（台風第 19 号）前後では全川的に堆積傾向となっており、最大 0.5m 程度河床が上昇している。釜無川においても、図 4-12 に示すように、H-140 より H-260 の区間で経年的に砂利採取が実施されているため、これらの人為的な影響が生じているものと考えられる。

笛吹川では、期間や区間により多少の違いがあるが、昭和 62 年（1987 年）から平成 30 年（2018 年）にかけて、全川的に洗掘傾向となっている。令和元年東日本台風（台風第 19 号）前後では、釜無川と同様に全川的に堆積傾向となっている。笛吹川では、図 4-13 に示すように、近年は砂利採取が実施されていないが、砂利採取が実施された平成 10 年（1998 年）までは、F-180 付近で河床が低下している。

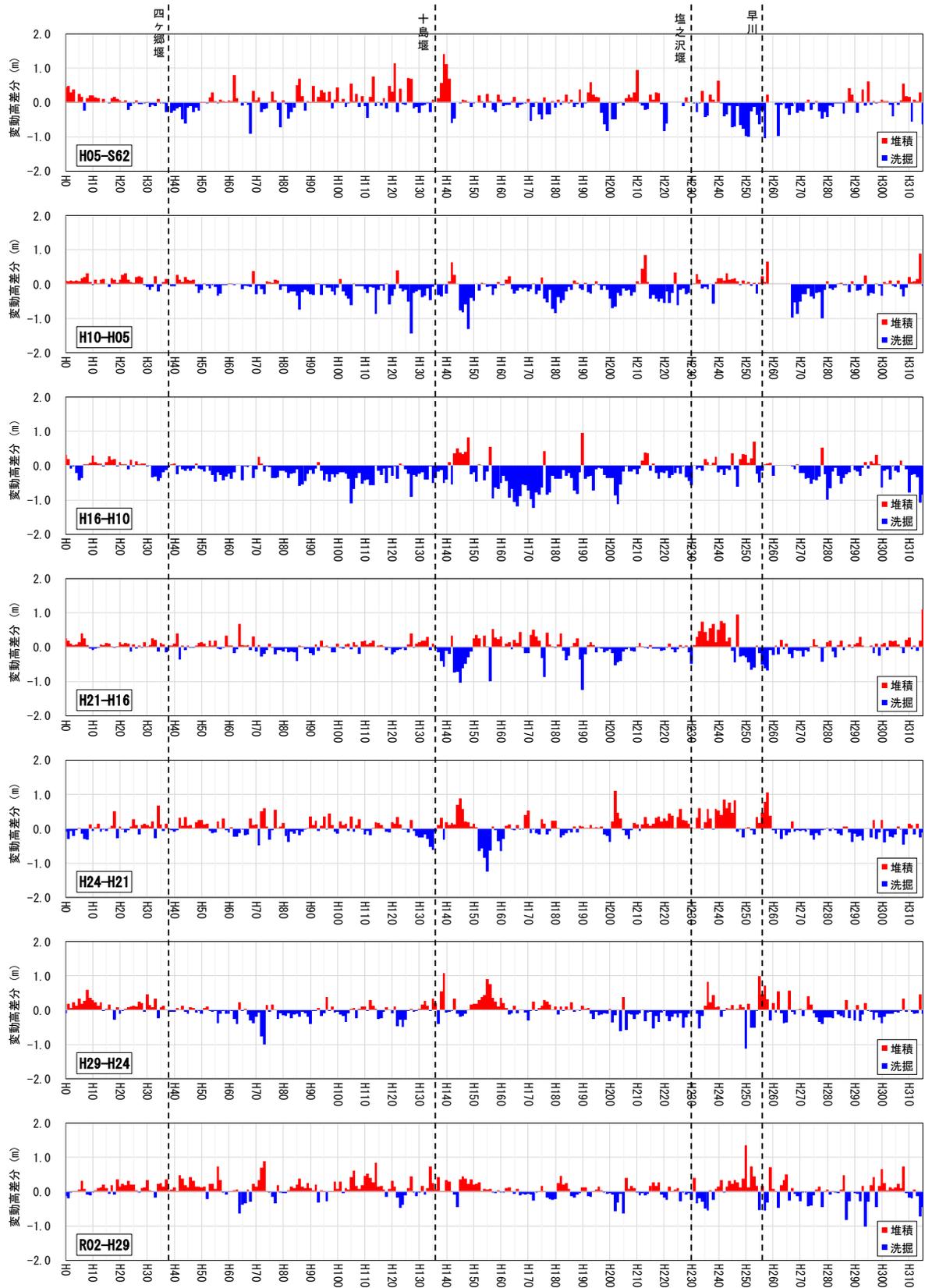


図 4-8 富士川の土砂変動量

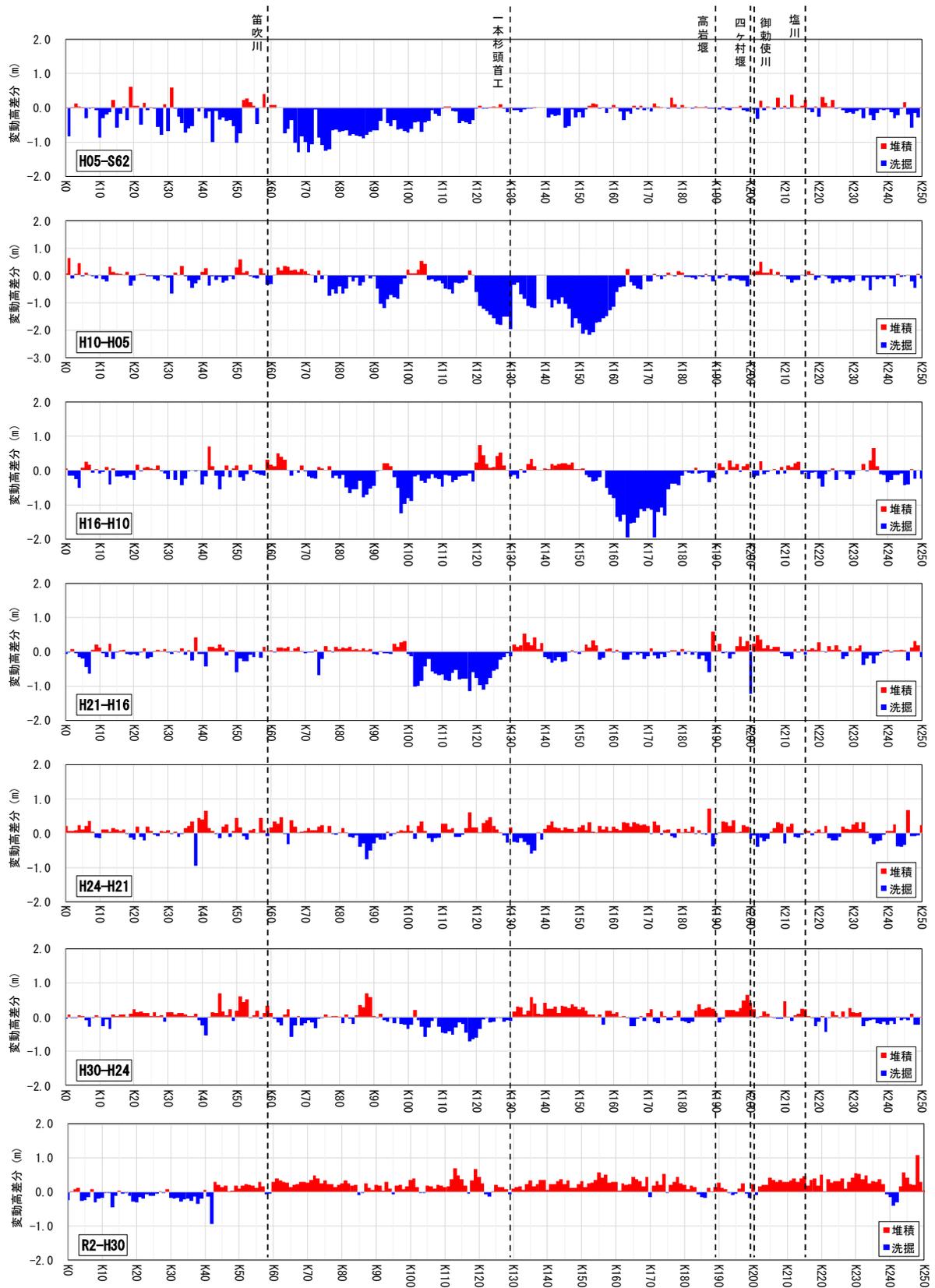


図 4-9 釜無川の土砂変動量

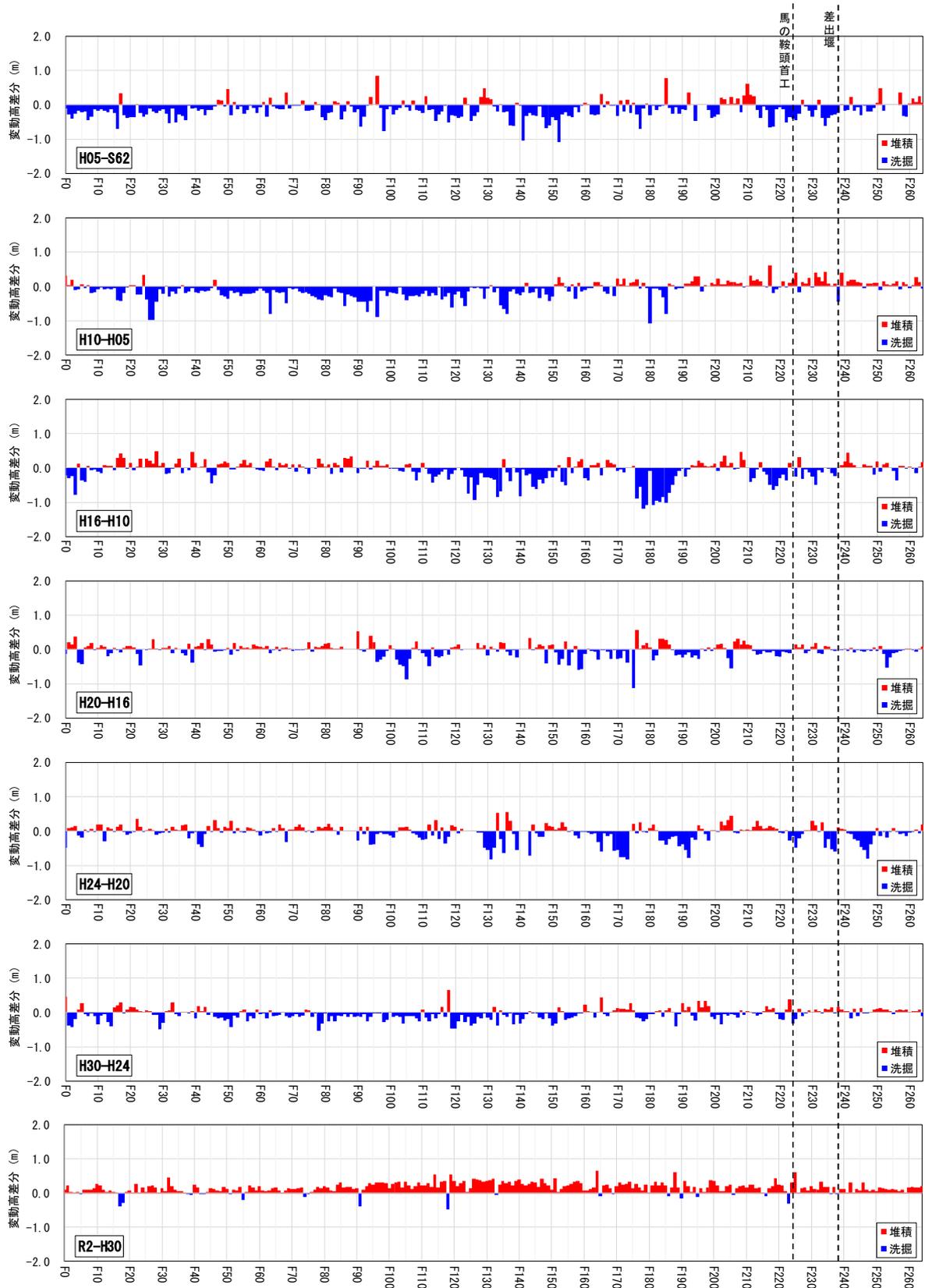


図 4-10 笛吹川の土砂変動量

砂利採取量 (千m³)

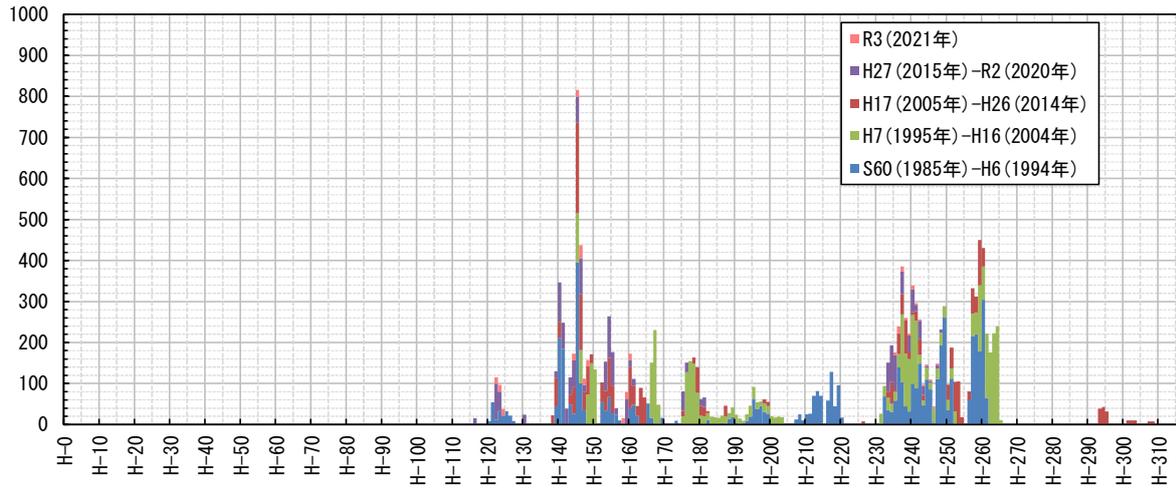


図 4-11 富士川の砂利採取量

砂利採取量 (千m³)

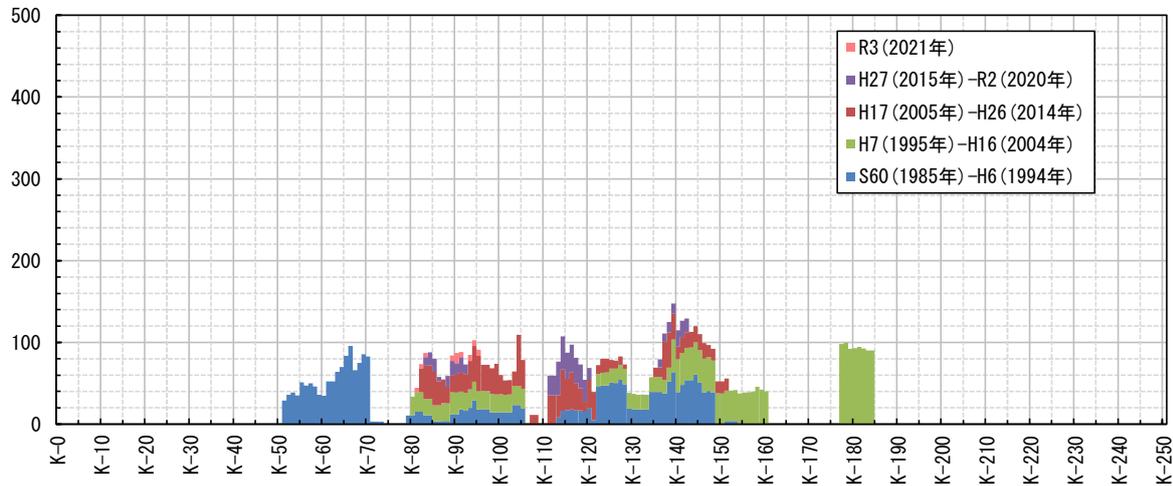


図 4-12 釜無川の砂利採取量

砂利採取量 (千m³)

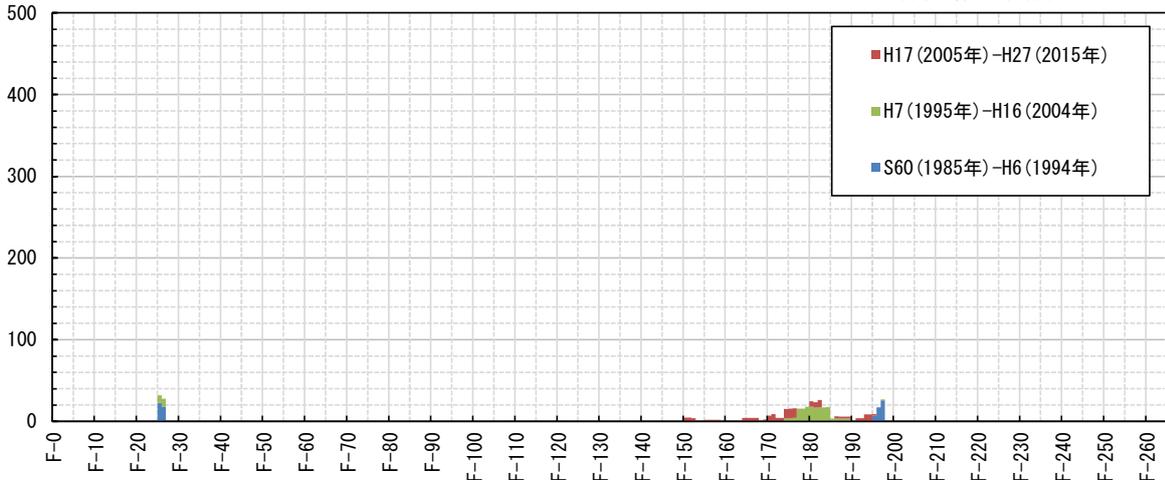


図 4-13 笛吹川の砂利採取量

4.3 土砂動態

富士川水系における平均河床高縦断経年変化図を図 4-14～図 4-16 に、平成 11 年（1999 年）から平成 30 年（2018 年）までの土砂動態を図 4-17 に示す。

富士川流域の西側に位置する釜無川流域及び早川流域は、糸魚川－静岡構造線が縦断し、基岩には亀裂が多く風化作用を受けて極めて脆い地質が分布するため、土砂の生産・流出が非常に活発である。釜無川は、糸魚川-静岡構造線の影響により土砂生産が活発であり、笛吹川との合流点までに、支川からの土砂流出と合わせて約 40 万 m³ の土砂移動が見られる。笛吹川は、土砂生産が比較的緩やかな傾向にあり、釜無川との合流点までに約 10 万 m³ の土砂移動が見られる。早川では、釜無川同様、糸魚川－静岡構造線の影響を受けており、非常に活発な土砂生産が見られる。富士川との合流点では、約 80 万 m³ の土砂移動が見られる。早川合流後の富士川では、上流からの土砂移動に加え、支川からの土砂生産が活発であり、約 50 万 m³ の土砂移動が見られる。河道区間のうち、主に堆積傾向が見られる区間において、特定砂利採取の活用等による河道掘削を行うことにより、近年では安定傾向を保っている。海岸区間では、急深な海底谷の影響による沖合流出が見られるものの、田子の浦港でのサンドバイパスや養浜により、汀線は安定傾向にある。

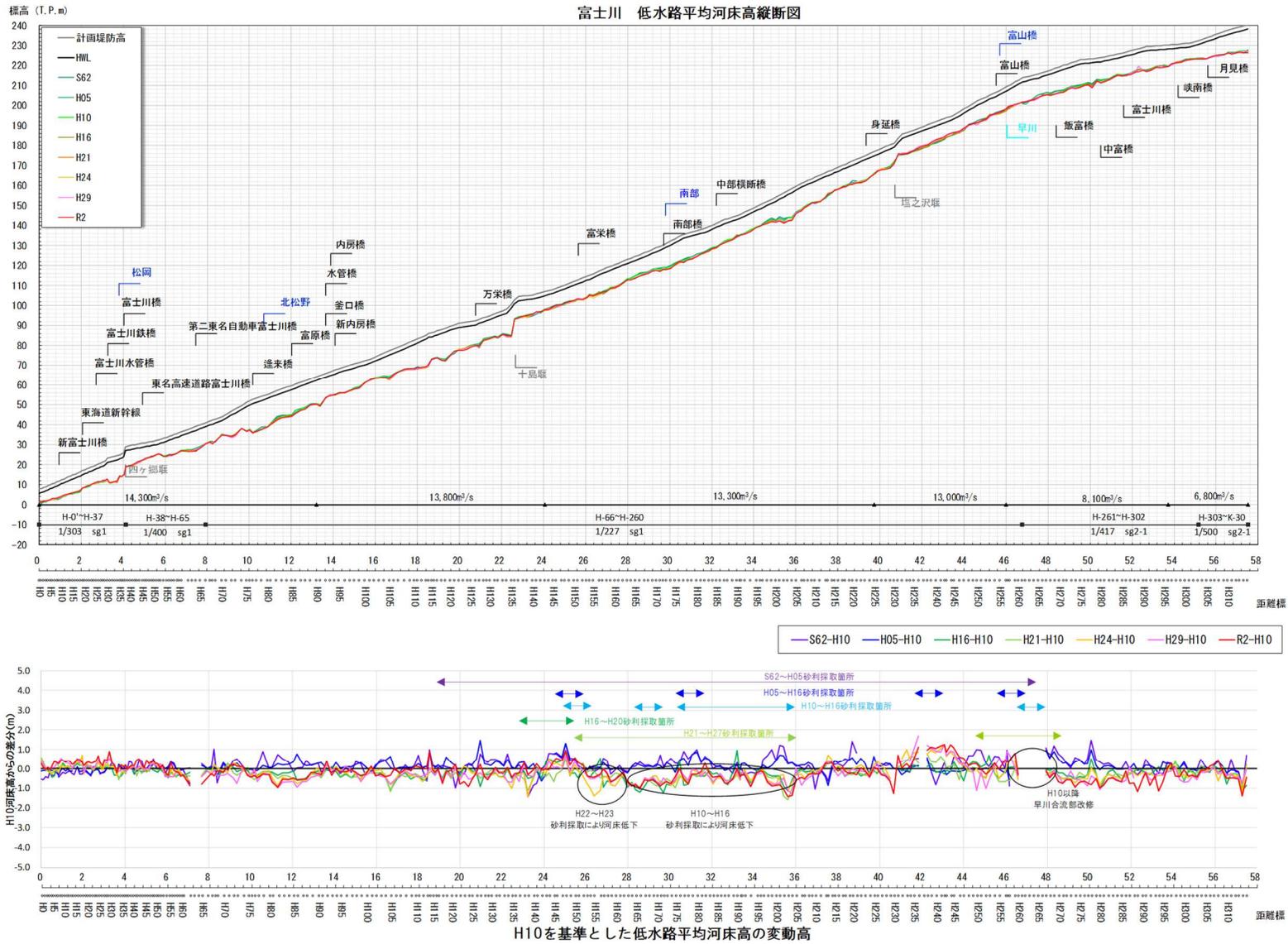


図 4-14 富士川平均河床高縦断面図

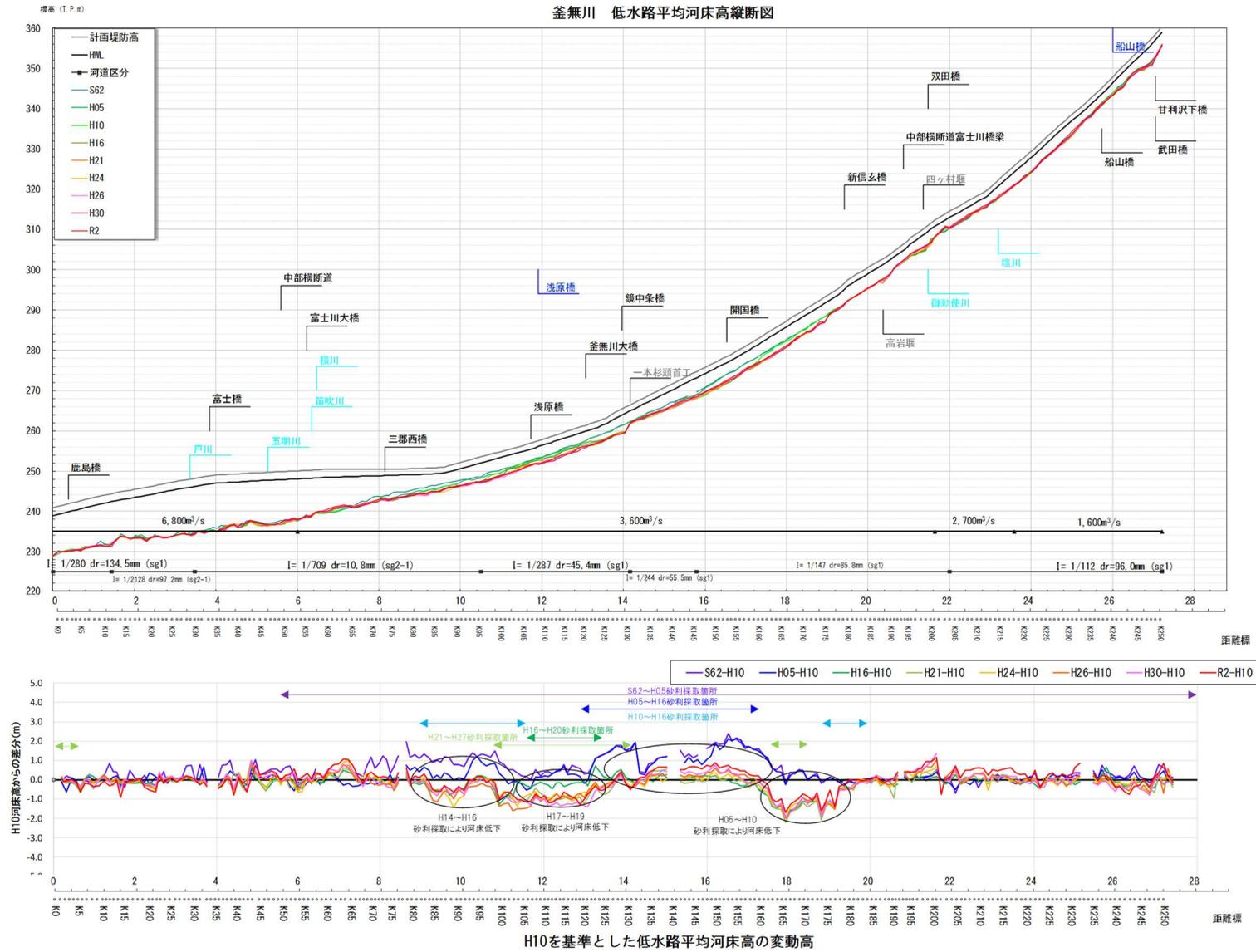


図 4-15 釜無川平均河床高縦断面図

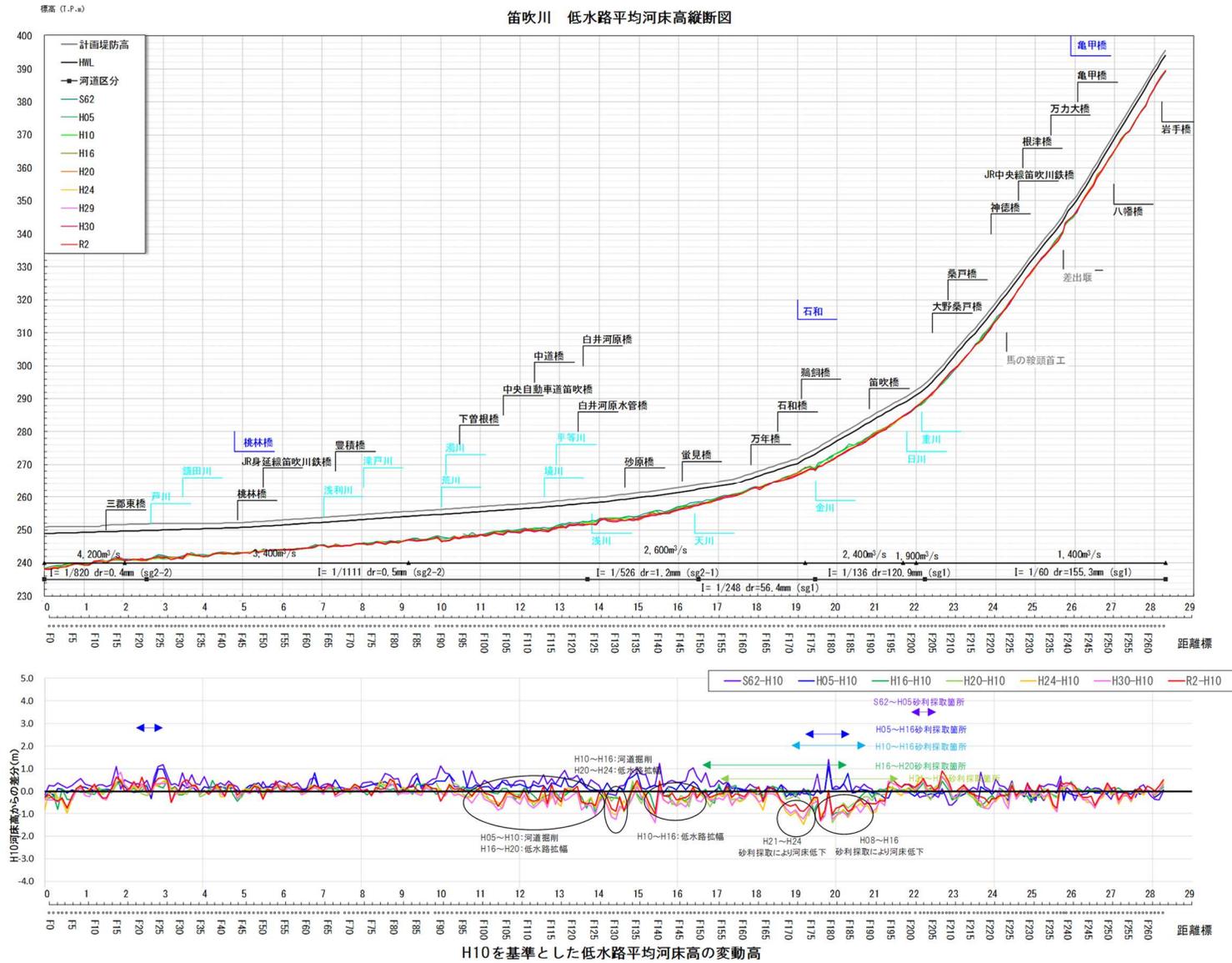


図 4-16 笛吹川平均河床高縦断面図

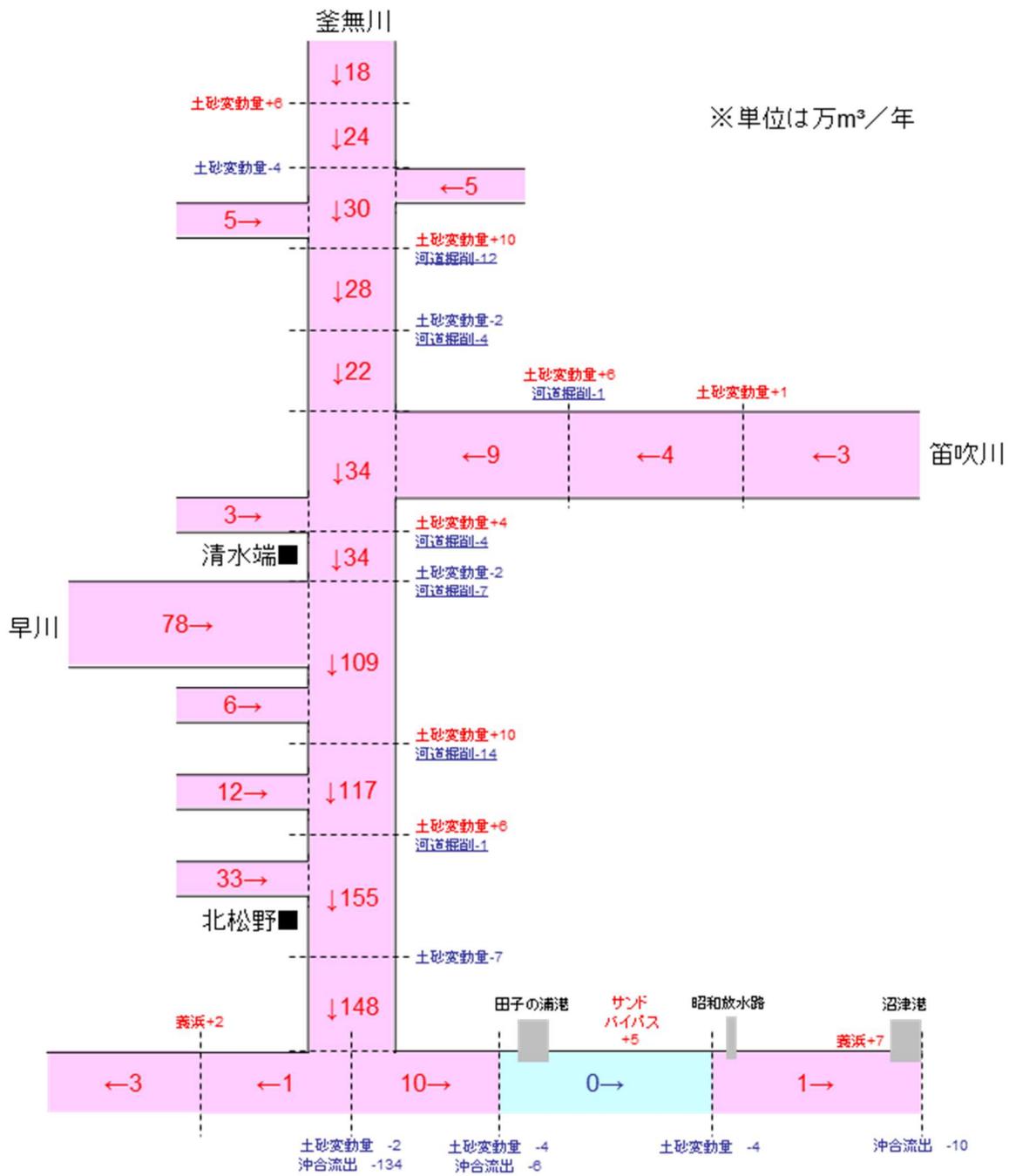


図 4-17 土砂動態 (平成 11 年～平成 30 年)

4.4 河床材料

領域ごとの土砂主成分を図 4-18 に示す。砂防、ダム、河道領域の主成分は礫～石であり、河口領域でも礫の割合が高くなっている。海岸領域の主成分は中礫～中砂となっている。

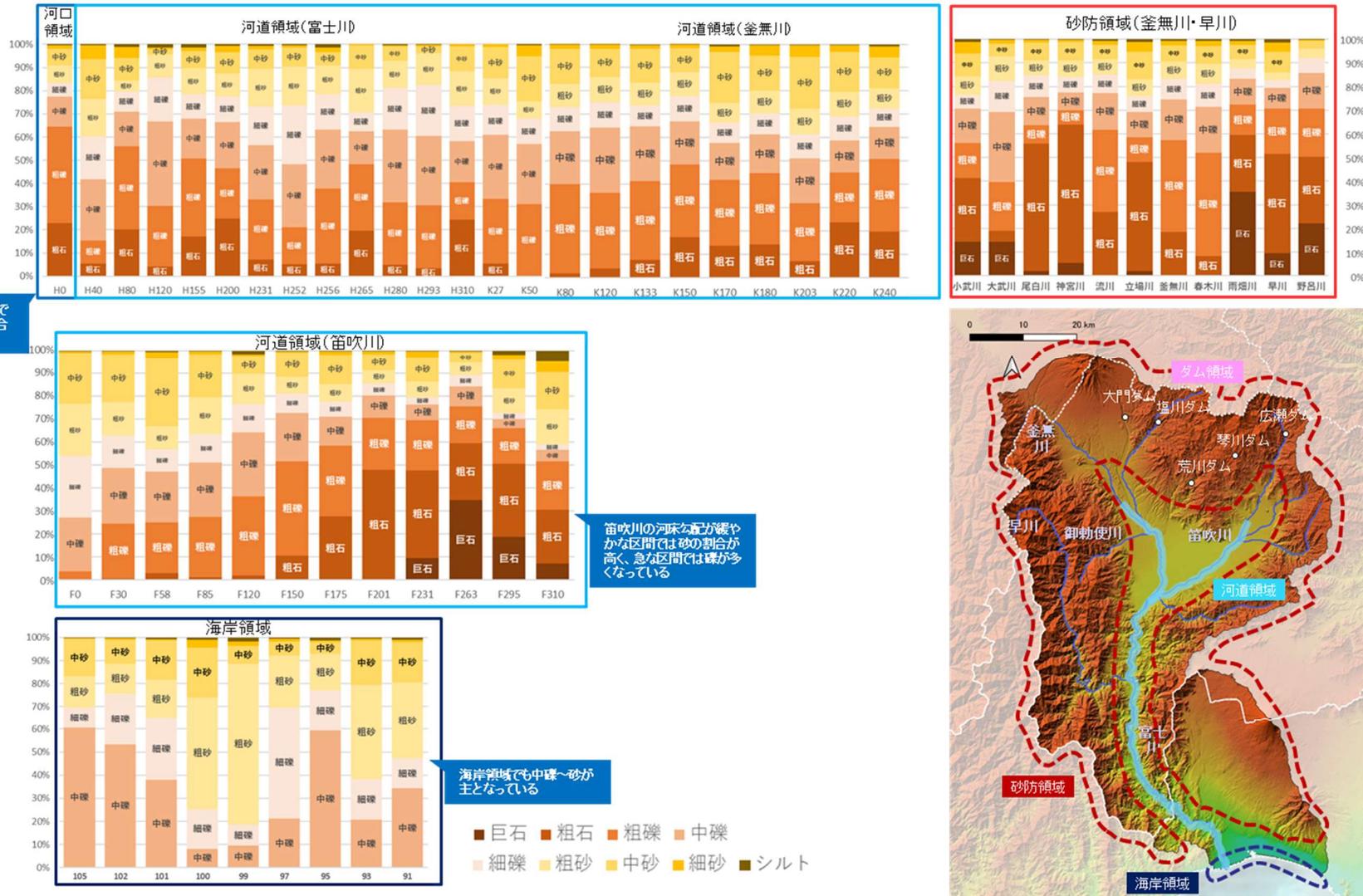


図 4-18 領域ごとの土砂主成分

4.5 河口部の状況

富士川河口砂州の開口部は、基本的に富士川左岸（東）側に位置する。河口部には右岸から左岸（西から東）方向に伸びる砂嘴が形成されている場合が多く、周辺海岸では西から東に向かう沿岸漂砂が卓越していることが示されている。河口部に設定された各測点位置を基準として昭和 30 年代の砂州と近年の砂州を比較すれば、海岸への張り出し規模が小さくなっており、富士川の供給土砂量が減少している可能性が示唆される。

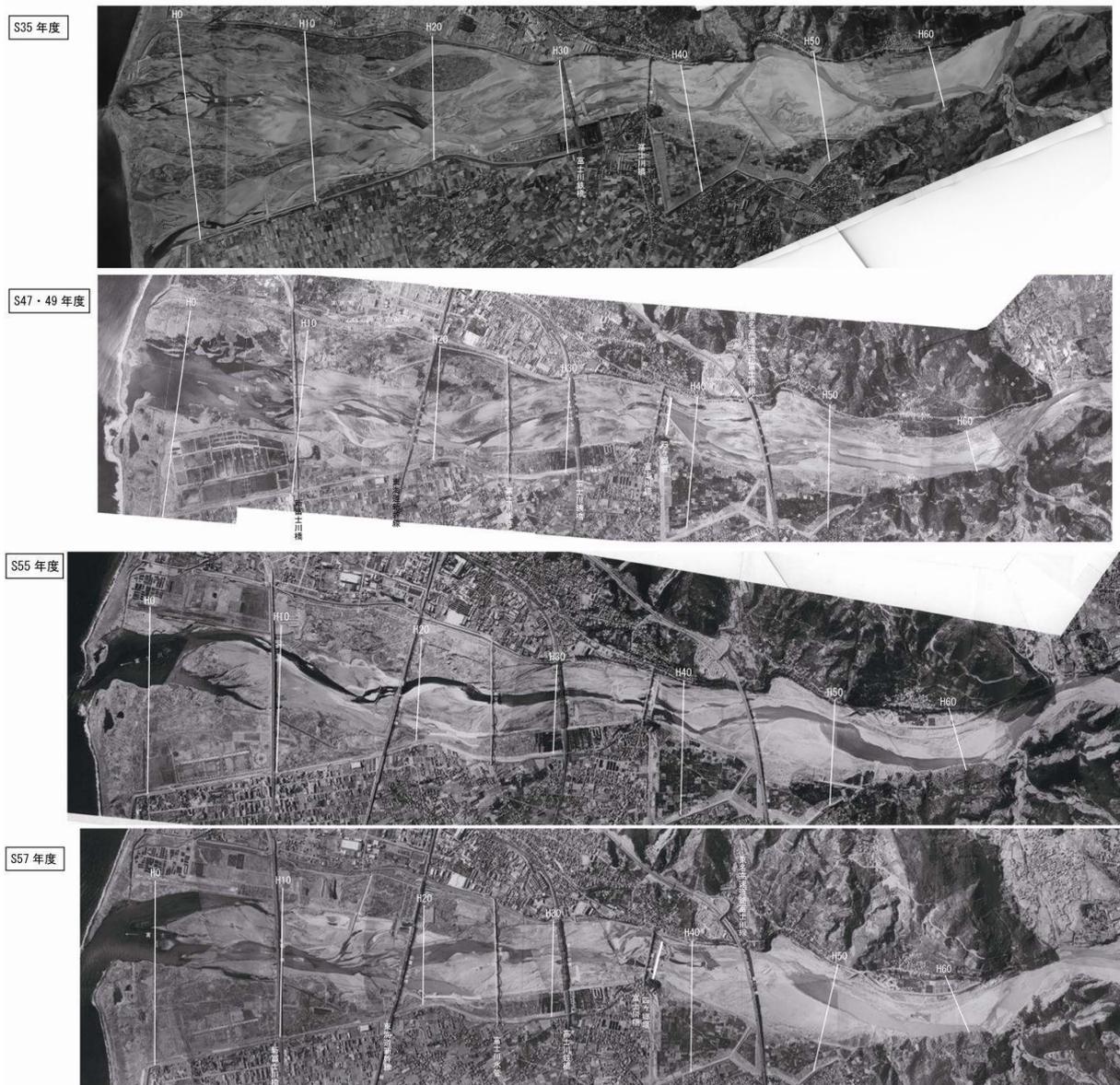


図 4-19 河口部の変遷

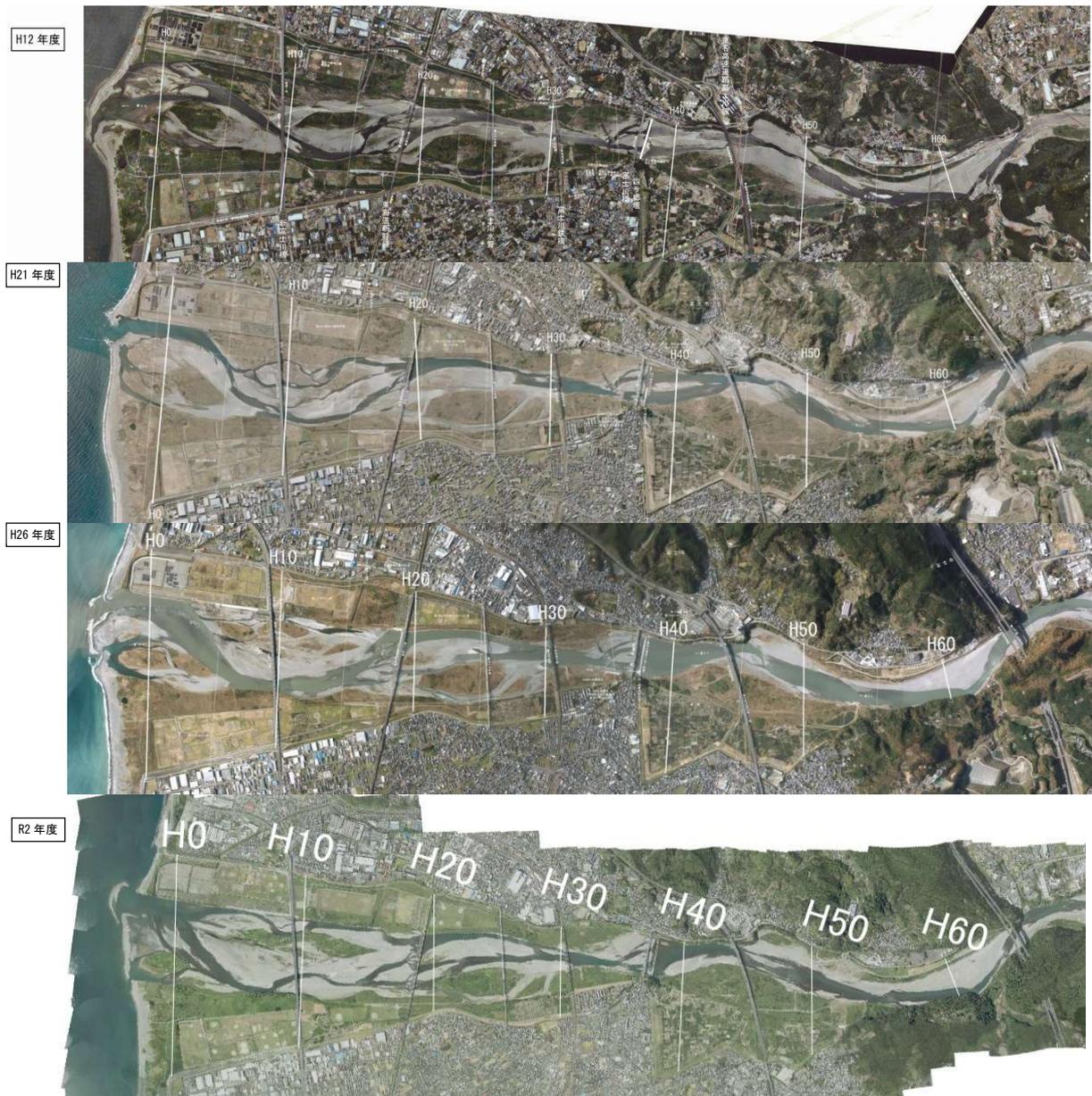


図 4-20 河口部における空中写真撮影

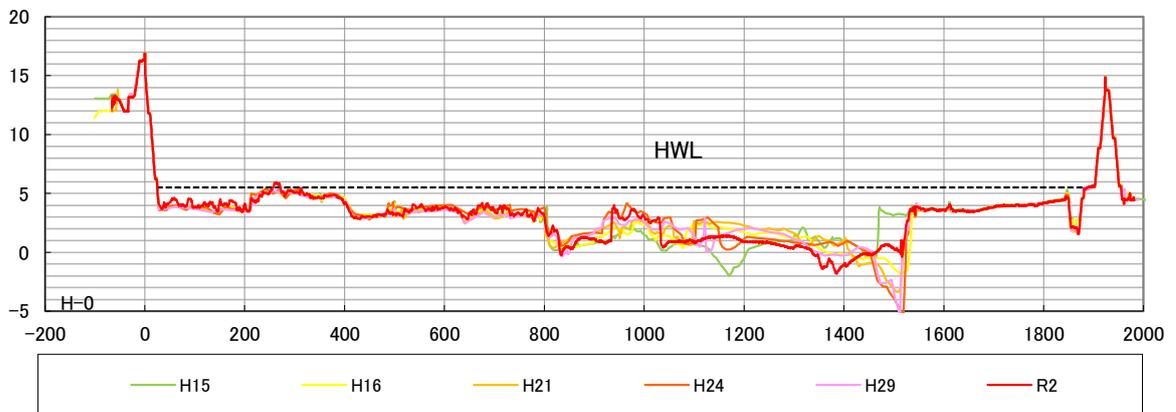


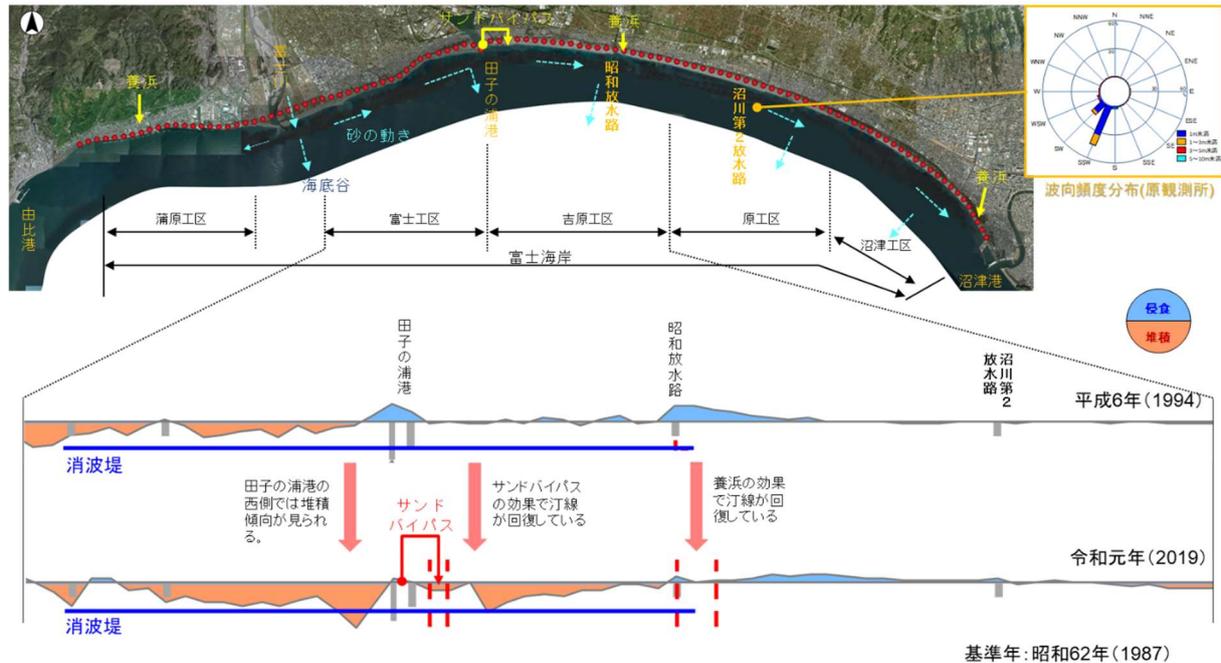
図 4-21 河口部における断面変化

5. 海岸領域の状況

5.1 汀線変化

富士川から流出する土砂が沿岸に供給され、駿河湾に面する富士海岸を形成している。沿岸部は水深 1,000m 以上の深海まで及ぶ急深な海底地形であり、海岸線後退の要因となっている。しかし、近年では、海岸保全施設の整備、港湾と連携したサンドバイパス、砂防と連携した養浜等により、海岸侵食は抑制され、回復傾向となっている。

図 5-1 1987 (S62) 年を基準とした汀線変化量の経年変化



5.2 海岸領域での取組

海岸領域では、海岸侵食を抑制、回復させるための取組が行われている。吉原工区では現在、年間約 4 万 m^3 の養浜を実施している。また、田子の浦港では、平成 12 年 (2000 年) から航路泊地整備で発生する浚渫土を養浜材に活用するサンドバイパスが行われている。

吉原工区の汀線も侵食傾向にあったが、養浜を実施したことにより、現在では回復傾向である。また、砂防事業と連携し、富士山大沢川の大沢遊砂地で補足した土砂を養浜材として活用している。



図 5-2 吉原工区全景



図 5-3 養浜工の実施状況

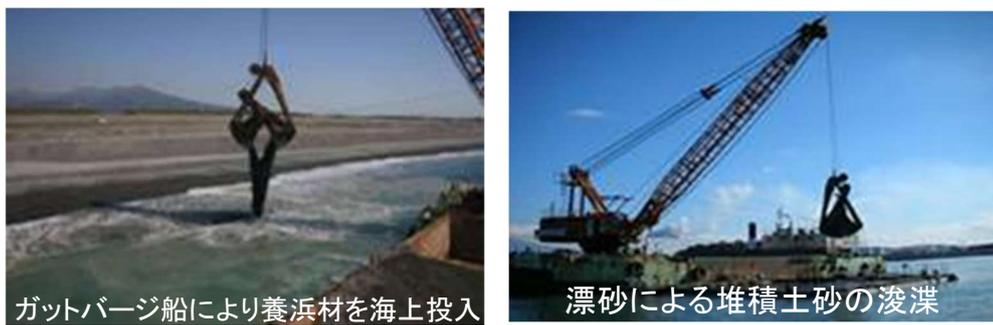


図 5-4 田子の浦港のサンドバイパス

6. まとめ

富士川流域は、南アルプスを通る糸魚川－静岡構造線の影響により極めて脆い地質構造を有しており、土砂の流出が著しいことから、土砂災害や洪水氾濫が幾度も発生している。一方、河口から流出する土砂が沿岸に供給され、駿河湾に面する富士海岸を形成している。沿岸部は水深1,000m以上の深海まで及ぶ急深な海底地形であり、海岸線後退の要因となっている。

砂防領域では、特に南アルプス山麓地域において、基岩に亀裂が多く風化作用を受け、極めて脆弱な地質であり、土砂の生産・流出が活発な地域であることから、砂防堰堤、溪流保全工及び山腹工等の土砂災害対策を実施している。

ダム領域では、補助ダム、利水ダム合わせて15基のダムが建設されている。一部の発電専用ダムでは計画堆砂量を上回る堆砂が見られるが、多目的ダムにおける堆砂は概ね計画の範囲内で進行しており、現時点で施設の機能を阻害する堆砂は確認されていない。

河道領域では、大規模出水時に大量の土砂流出による河積不足が想定される一方で、令和元年（2019年）10月洪水では複数地点で河岸侵食や堤防・護岸の被災が発生している。継続的な河積確保対策として、特定砂利採取を活用した河床掘削を実施している。

海岸領域では、海岸保全施設の整備、港湾と連携したサンドバイパス、砂防と連携した養浜等により、海岸侵食は抑制され、回復傾向となっている。

富士川流砂系では、土砂に起因する様々な課題に対して関係機関が協力し、解決に向けた改善策や目標を検討して総合的に取り組むことを目的として、取組の連携方針を策定し、関係機関の連携強化を図っており、引き続き、各機関における取組を進めていく。